

浄土

五月号

特集 仏教・浄土の未来像(その二)

昭和十年五月廿四日 第三刷郵便物認可(毎週一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 通称省(特別送達郵便物第三十二号)
昭和三十八年四月二十五日 印刷 昭和三十八年五月一日発行



法然上人鑽仰会

待望の書出ず!!

法然上人が現代においてになったら

「選択本願念仏集」を

このようにお説きになるであろう

竹中信常 著

選択集私解

新書版 一二〇頁
定価 一二〇円
送料 三〇円

難解な内容を平易に

若い世代にピッタリ

全浄土宗徒は必らず一冊

施本用に御利用下さい (五部以上送料不用)

発行者 法然上人鑽仰会

発売所 大道社

▶ 仏教保育テスト ◀ めぐみ

指導 大正大学教授 文博 竹中 信常
画 井上 与志夫 / 萩原 弘志 / 野沢 知且

B5版・48ページ 定価 100円・千40円

目次

おやくそく
はなまつり
こいのぼり
おぼん
おひがん
じょうどうえ
ねはんえ
ひなまつり
みおしえ
保育テスト

めぐみをうけて
よい子はそたつ

多数ご注文にはお割引いたします

発行所

東京都千代田区
飯田町1の21

大道社

TEL <332>5944
振替 東京 8247

浄土

五 月 号



奈良・興福寺における鹿

人目をかざらずして、往生の業を相
続すれば、自然に三心は具足する也。

法然上人御法語

—◇目 次◇—

表紙

東魏・天竜山 第三洞浮彫

- 憲法と仏教……………磯 部 常 治 (2)
三分門法 法然上人の御影について……………井 川 定 慶 (6)

特集(その二) 仏教・浄土の未来像

- 明日の浄土信仰の出発点……………大 谷 旭 雄 (8)
インドのアーシュラム……………佐 藤 良 純 (12)
教シリーズ 私の歩いた道……………須 藤 和 子 (14)
近代 桑 門 秀 我……………大 橋 俊 雄 (18)
高僧 紀行文 アメリカ旅行⑩……………佐 藤 治 子 (20)
御法語をいただく…………… (27)
表紙の写真…………… (32)
リメンバー・三河島…………… (27)

- 三部経の再発見 ④……………須 藤 隆 仙 (28)
編集後記…………… (33)

憲法と仏教

一、日本憲法の理想と目的

日本は第二次大戦に無条件降伏してボツダム宣言及世界人權宣言を受諾し、昭和二十一年十一月三日、日本憲法を制定し、

1 国民は正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し吾々の子孫のために諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたって自由をもたらす恵沢を確保し政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないようにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言しこの憲法を確定した。そして国政は国民の厳肅な信託によるも

磯部常治

(弁護士)

のであってその權威は国民に由来し、その権力は国民の代表者が行使しその福利は国民が享受する、これは人類普遍の原理でありこの憲法はこの原理に基くものでわれら国民はこれに反する一切の憲法、法令及詔勅を排除するとし、

2 日本国民は恒久の平和を念願し人間相互の關係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼し安全と生存を保持しようと決意し、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において名誉ある地位を占めたいと念願し、そして全世界の国民がひとしく恐怖と欠乏から免がれ、平和のうちに生存する権利を有する



ことを確認し、

3 そしていずれの国家も自国のことのみに専念し他国を無視してはならないのであって政治道德の法則は普遍的なものであり、この法則に従うことは自国の主権を維持し、他国と対等の關係に立とうとする各国の責務であると信じ、

4 日本国民は国家の名譽にかけ全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓って制定されたものである。

而して、其条章の大意は、天皇の地位を象徴とし、主権在民、戦争を放棄し、国民の権利義務については基本的人権を享有し、法の下に平等にして自由及權利は国民の不断的努力によってこれを保持しなければならないと共に国民はこれを濫用してはならないのであって常に公共の福祉のためにこれを利用する責任を負い、国民の基本的人権は侵すことのできない永久の權利として現在及将来にまで与えられ其國權の行使は國民を代表する選挙された議員を以て組織する国会に立法權を、内閣に行政權を、最高裁判所に司法權を、國の財政處理の權限を国会の議決に、地方自治基本原則である地方公共團體の組織及運営に関する事項は法律に定めることとして制定されてある。

二、信教の自由について

而して、信教の自由については憲法第二十一条に何人に対しても其自由を保障し得る宗教團體も國から特權を受け又は政治上の權力を行使せられず、又何人も宗教上の行為、祝典、儀式又は行事に参加を強制されず、國及その機關は宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならないとして信教の自由を保障して居るのである。ただその自由は國民が個人の資格に於て國權を行使して國政の運営に關与し得る能動的地位において保障せられるべきいろいろの自由の權利を有すると共に、又責任であり義務であると言わねばならぬ。殊に信教の自由は内心的作用として外部より威圧を受けない民主主義政治確立の基本を成すもので、いかなる權力によつても侵されない自由の權利である、故に憲法は特權宗教の存在を否定し國及其機關は宗教教育其他いかなる宗教的活動もしてはならないこととし即ち政教分離の原則を確立しているのである、従つて信教の自由の内容を分析すれば、

1、信仰の自由、

2、宗教的行為の自由、即、堂宇、社殿、礼拝、祈禱、祈願の自由、

ハ、宗教的集会、結社の自由、団体を作る事同信者が集って共同して宗教的行為をなす自由、などである。

三、信教の自由の制限

しかしこの自由は憲法第十二条により、公共の福祉に反しないことの制限を受ける事は他の自由と同じでその制限は即ち、

1 破壊活動防止法により、特定の暴力主義的破壊活動についてその実行の正当性又は必要性を主張し推進し支持し又は文書図書を印刷頒布し公然揭示する思想表現の方法を禁じ、

2 東京都の集会等の取締に関する公安条例、に公共の場所に於ける集会又集団の行進及あらゆる場所に於ける集団示威運動は法定の例外を除き公安委員会の許可を要するとし、

3 人事院規則、には一般の政府の職員は特定選挙について反対し其他政策に影響を与える目的をもって政治的団体の結成、集団行進示威運動著名運動を企図したり集会などで政見を発表し文書図書を国の庁舎に掲示し政治的印刷物を発行することを禁止して居る。

従って、これ等に違反すれば処罰されるのである。以上制限内に於て信教は全く自由である、凡そ正しい信仰の保持者にして右の制限を弁まへざるものはないのが本當の信仰である。この制限を侵すが如き信仰者は誤れる宗教であり、正しい信仰とはいえないであらう、かく憲法は信教に自由を与えたるが故にこの国民としての憲法擁護に対する責任の重大なることを忘れてはならないと思う。

四、池田総理の提唱と憲法の改正

此時にあたり池田総理は日本の人づくり、国造りを提唱され且憲法改正調査会を設け、天皇の地位、自衛隊の軍隊化、国民の義務の条章の増加などにつき論議されて居るようであるが、憲法の理想と目的よりして誠に重要事にして、この改正は各議院の総議員の三分の二以上の賛成を要し且その賛成決議に対し国民過半数の承認を得なければならないので国民は決して無関心でいることはできない重要な事項である。

五、憲法と仏教との関係

仏教は正しく明るく仲よく生き生かす共生が仏陀の教義

であり本当の仏教である。印度の釈迦釈尊が身を以てなせる体験に基く宗教であり、東亜は素より世界各国の等しく是認せる宗教である。これを信仰することに憚るところは無いのである、然らばこの仏教信者である国民が仏教の遵奉精神を以て日本憲法国政の構成員たる国会議員を選任して選挙するときは、仏陀の説ける仏国浄土は建設され前述せる憲法の理想と目的を達し、平和のうちに生存する権利を有することが出来るのである。

六、結 言

然るに現今に於ける日本の仏教及仏教信者の一部には、信仰を学校教育にのみ委ね或はそれを以て事足れりとし寺院僧侶は自己寺院の単なる美化又は地位の高上或は私利送葬を営むを以て仏教であるが如く誤解し最も肝要なる憲法上の国権を完うせねばならぬ国会議員の選任選挙のことを忘れる信者僧侶寺院等なしとせず、かかる信者僧侶寺院こそ寧ろ国権の行政を害するものといわるるも過言ではないと私は考える。何故ならば、若し然るものが跋扈し多数の議員を選出して国政を営むとせば決して正しい国民の自由人権は正しく擁護されないことになるからである。

然り然らば仏教信者が眞の平和即ち極楽浄土を希求せんとするならば有意化して正しき国会議員の選挙に信行することこそ憲法による自由なる信教を完うする所以ではなからうか？ この道理はいかなる宗教信者にも通う真理にして忘れではならぬと思う。

眞に生き生かさんとする眞の仏教を遵奉し且実行即信行せんとする信者は憲法上与えられたる自由の権利且負はされたる義務である責任を以て暫い立ち完うすべきであると強調する。信仰は決して観念的であつてはならぬ、信行実行そのものでなくてはならぬ、仏教は死物化した眠れる宗教であつてはならぬ、憲法と共に生き生かす様実行に反省改悟すべきである。若しこの反省改悟なき時は眞の仏教は亡び去って再び戦火惨過の隸従とならざるを得ないことなしといえないであろうことを憂いて擱筆する。

会員各位にお願い

1. 会員五名以上で支部をご結成下さい。
2. 支部には、支部拡張用としてお申し込み次第、無料で見本「浄土」をお送りします。
3. 支部には、毎月「浄土」を一冊贈呈致します。

法然上人の御影について

井川定慶
(文学博士)

日本に於ける念仏の元祖法然房源空上人は庶民教化を目標として浄土宗を別開され、そして決然として比叡山を下り京路の巻に念仏

(肖像)が法望や関白其の他上層階級の帰敬が基因となつてつくり出されることになるのです。

期の大衆にはこれされましたが、それが想いがけなくも当時の上層特権階級にまで及んで

また滅後百年の頃に伏見、後伏見、後二条の三帝が勅願されて上人の御伝四十八巻が勅修せられることになるのです。

だんだん信望を厚くされて行きました。関白九条兼実公が其の代表でありましょう。彼の日記「玉葉」を抜いてみると上人は招かれて屢々九条邸に入り円頓戒を説き且つ念仏のみ教えを勧めていられます。そして遂に兼実公を出家せしめ「円証」という法名をさへ授与されているのです。また北政所や其の女で中宮になっていられる宜秋門院様にも戒を授けられています。この事が機縁となつて参内して法望様に授戒をせられ、更に上人の御影

さて肖像をつくる動機について上人自ら『逆修説法』(黒谷上人語灯錄巻八)に「凡そ祖師の真影(肖像)を図するに即ち二とはりの意が有る一には恩徳を報ぜんが為め、二には賢を見てひとしからんことを思う為なり」と述べていられる。換言せば一には祖徳の讃仰もしくは御恩報謝の為め、二には自己の修養の爲めに祖師を生きたお手本として自分もそうなりたいたいという念願から描くものだというのです。此れは上人が当時の思潮を代弁

せられたのでありましようが、いま法然上人の御影が数多く作り出されるについても大体以上の二種の理由に基いていふと考えられます。即ち上人御存生の間にあつては上人を崇敬する信者達は座右に安置し御本人に対するに同様の思いをもつて供養給仕をなし、且つ自分のよき反省の資となしたことでありましよう。上人の滅後は上人そのものの如く取扱ひ、敬慕尊崇の誠を怠らず、時には仏、菩薩と同程度に崇敬を捧げました。そして特別の堂舎を造営してその本尊として仰ぎ礼拝する対象となすに至っています。

法然上人を主題にして別伝とか絵伝が幾つかつくられています。前述の勅修法然上人行状図四十八巻(勅修御伝)のように新国宝に指定されたものを始め増上寺、知恩院、本願寺、瓜連常福寺、堂本印象氏に所蔵されている重要文化財指定の優秀なものが十餘種百二十餘巻に及ぶといふことは全く類例がないので他の誰々よりも隔絶して数多いのですが、今また法然上人の御影に於ても同様でありまして重要文化財指定三点、重文指定ではなくとも実に優秀な作品の数多くが遺されています。

す。而かも其の数多いことは一種を幾つかに複製した為ではなく夫れぞれ別個独自の由緒を備えつくられた逸品ばかりだから驚くではありませんか。

〔国宝〕勅修御伝四十八巻の中に上人の御影として彫刻一軀と絵画五幅のことが書かれていて其のつくられるに至った由来までが添えられています。また拾遺古絵伝(重要文化財)

には別の一本が載せられています。其他に上人伝には収録されてはいませんが、鎌倉時代のものとして正和四年(一一三五)の刊記をもつ稀観版画さえ現在知恩院には遺っています。別に茨城県瓜連常福寺には椅子に坐していられるちょっと珍しい法然上人像(重要文化財)一幅があります。また京都黒谷金戒光明寺や京都府栗生光明寺にも秀作が保存されていますすし、嵯峨二尊院所蔵の「足曳の御影」(重要文化財)は寺伝は兎も角上人御在世の中に描かれた御影でありましょう。

また上人が弟子勝法房のもとに依り彼が描いて来た御影を自らの前に置かれ鏡二面を左右の手にもち水鏡を真正面に設け頂の前後まで見合せられて違ふところには胡粉を以つ

て直おされたという「鏡の御影」の由来(勅伝巻八)がなつかしめます。

前記の正和四年版画は此の「鏡の御影」を木版にうつしたと刊記に添記されています。

此の版画は上人御影と価値だけでなく世界版画上でも第一級品であることを申添えましょう。

木影で現在なら県当麻寺奥院の本尊となっているのはもともと知恩院から移されたものですが、此れも勅伝巻三十七の説明によりますと、武蔵の国の御家人桑原左衛門入道が上人の化導を伝えき吉水の御房に尋れまいり念仏往生の道を教えられて後には全く但信称名の行者になりりますが、余りに上人が慕はしく共に暮したい一心から住所も程近くに定め更らに自ら刀をもつて上人の肖像を彫作し上人の開眼供養まで蒙つて自らの龕室に持ち帰り夜とても上人のおそばにいる感じで起き伏していても鄭重に給仕したという木像であります。上人御往生の後ちに生身の上人のおもいでをなして朝夕帰依渴仰していたので

すが、彼も往生の素懷を遂げると年来回夜の尼が本国へひき上げる際に件の御影を知恩院へ送り届けられました。そして後ちになって当麻寺に知恩院の奥院として往生院が建立される際にいろいろの宝物と共に京都から此の大和へ移されたというのです。

或時に盗賊が押入つて此の木像に釘を打ち込んだところ生血が流れ出たという「血垂れの御影」の伝説が附加されています。

尚ほ鎌倉時代の肖像画の名手藤原隆信が後日沙汰との勅命で描写した「隆信の御影」や隆信の子で矢張り似絵の大家信実の筆になるもの、関白九条兼実公の希望でスケッチされたという「足曳の御影」、選択は伝授記念の御影さては展覧の御影、母親の手紙で手つくりされた「張子の御影」など何れも興起深い由緒のついた逸品の数々が遺されています。此の点からも上人の遺往を偲び景仰する次第であります。

(二月二十七日浄土宗記念日謹記)

三分間法話

その七

仏教・浄土の未来像

明日の浄土信仰の出発点

大谷 旭 雄

(東京・重願寺住職)

(一)

昨年来、欧米を一顧したときのこと、イタリアのミラノにあるドーモ寺院では広大な堂内の静寂な宗教的雰囲気のため片隅に一人うづくまって薄明りのローソクのたち並ぶ聖者の画像と前に悲愴な面もちでコメカミをおさえて懺悔する若い夫人の姿を見、又フランスのノートルダム寺院でもこの光景が目についた。オランダではカソリック信者の青年から人生信仰上の悩みの処理を如何にしているのか、通訳を通して種々と聞いたことがあった、彼はいち早く信頼する牧師の導きによって示される人生、信仰上の指針によってしかも十分満足しているとすなおに確信をもつ

て答えてくれた。私の目に彼が非常に幸福そうに映って今なお思いだす事がある。

又日曜の朝家族そろって幾組ものグループがすいこまれる様にして教会へ集ってゆく、心からの懺悔と新たな明日への祈りをささげにゆくのであろう。

見る事、聞く事私の立場の爲もあってか、羨ましく、また宗教人と宗教人としての多くの反省を与えられ、異国各地のすばらしき風光。草原に点々と群れなすホルスタイン牛。風車のえがく絶景にもまして美しい光景として受けとれた。そしてその中に信仰の生々しさを感じたのであります。

国々を人種こそちがえ、如何に日本人の思考方法が転変したからとて日本人に限って仏や来世、自己の反省(懺悔)が由来ないと云う事はないはずである。日本人の信仰動向の中に、或はその思え方の中に、或は寺檀と云う関係で進められる信仰組織、求法、伝導の方法と云うものになおに、仏を信じ仏に従順して一貫して絶対者の救済にしかたってゆけないカベがひそんでいるのではないだろうか。

現在の様に人間主義文化の華かな中に生きる我々はこの現世を最もよい、最も住みよい処にしてゆく努力、そののみが人生、社会への目標であると考えているものが多いの

も当然である。科学も極度に進展し、人間の経済生活も大いに向上し安定しつつある。社会の表面から見れば何の不安もなく活動している。しかし社会の表面に表れるみにくさの外に裏面にひそむ幾多の苦悩が社会の中に個人個人の中につまれていてのではないだろうか。しかしこうした社会に生れ、住み、そして死んでゆく我々がその生活をより広明に営み、うるおいある人生、そればかりでなく更に一切の苦悩や死の不安を乗こえてその理想の世界に体達してゆく為に宗教、信仰我々には浄土教のある事をわすれてしまっていないでありましょうか。宗教を非現実、非科学的なものとして片づけようとしていやしないだろうか。人間に宗教が必要であるかと問えば不要であると云う、或は必要を感じた事がないと云う者が異外と多い世の中であります。

仏教は中道実相をとき、縁起をとき、宗教と科学の一如をとき、精神と物質の一体なる事をおしえ、精神生活、物質科学のどちらにもかたよらない表裏一体の調和を保つ為に常にうつりかわりの運動をしているものであることを教えている。物質科学の進歩した現実的な時代の中では宗教は真向からその人間主義に立向って正しい批判を与え正道を歩ませ、真の目ざめた人間をつくる為にきらわれながら

批判しつつづけているものであります。一方的な片よった思素や行動のない様に、明るい争いのない社会をつくる為に。我々はいちはやく宗教信仰の必要を認め、自覚して、個々に与えられた（浄土教）正道の信仰をもって歩みつつづけてゆかなければなりません。

(二)

来未の浄土教のあり方については組織の上に、教義の上に種々と要求もあり、特に現行の信仰生活にも大いに改善が望まれ充実したものとしてゆかなければなりません。紙面の都合もあり今は後にゆづる事としておきます。

将来の浄土教のあり方を考えるには今を大切にして移り変わる動向を見きわけつつ次の瞬間を念頭においてゆかなければなりません。そこで私はこの命題を日本人の信仰動向、時代思潮を考慮しながら将来の念仏者が確固たる信念をもって念仏信仰が続けられる事が特に必要と考えて、将来への幾多のあり方をえがくことをひかえて唯一つ最も浄土信仰の基盤となる「安心生活」のあるべき姿を考えて見たいと思います。

仏教で云う安心とは邪見を払って仏の正法に安住する心

の状態を指し、浄土宗では我々が弥陀仏との関係を意識する心の状態を安心と云っております。この様な心づかいを以て念仏生活を営むことが安心生活であります。この安心に総安心（シャバを厭い浄土を願う）と別安心（至誠心、深心、回向発願心）がありますが今後の安心（三心）についてのあり方をまず考えて見る事にします。この三心は元祖が「三心具足は是れ行者の至要なり」「浄土宗の大事は三心の法門なり」（七カ条）と云われる程、信仰者にとって至要大事の心づかいであります。この三心はまとめて云えば真実の心によって深く弥陀の本願（救済）を信じ、其の浄土に往生せんと願う心であり、約すれば「唯助け給え」の一つの願心に外なりません。そこでこの三心を具足する方法として元祖（東大寺十問答）は

(一)行具三心ニ念仏相続により疑心なきに至ればすでに具足す

(二)知具三心ニ浄土の智を以て信をとり難きを経論の明文を出して解釈の趣を談じて念仏の信をとらしめんとして得るものの二法あることを示しておりますが元祖の本意とするところは云うまでもなく行具の三心であります。現代人に於ては智具三心の方法は特に活用せられるべきと思いません。今三心の一々の内容について述べる間もありません。

で「三心はまちまちに別れたりと云えども要をとり詮をえらんでこれを云えば深心におさまなり」（三部経釈）と云われるのに従って深心即ち信機信法についてそのあり方を見て見ようと思ひます。

勿論元祖のこの意中浄土の信仰そのものがこの二信を出発点とし詮要とすることも明かであり、云うまでもなくこの二信がかかげいい加減であるなら最初からその信仰そのものもグラついたしかも救済の対象としてふさわしくないものとなってしまふわけであります。この二信は「はじめにわが身の程を信心（信機）、のちに仏の力を信ずるなり。のちの信の為にはじめの信をあぐるなり」（浄土宗略抄）と云われ、先の信機が如来の大悲不可思議力の救済を確信し得る基盤となるものである事を示しています。

では機を信ずるとは何を信ずるのでありましょうか、法語に①我は罪惡不善の身、無始よりこの六道に輪廻して往生の縁なきを信ず②いかにすみ深くおろかにつたなき身、等と示されておりますがこの様に根本的な人間惡を対象としてこれに自覺をなすのでありますが、こう云う自覺が出来れば弥陀仏への志向は増大してゆくものであり、救済にあづかり得る資格を得る事になるのであります。しかし様な根本的な人間惡と云う罪惡住と云うことの自覺六道輪

廻と云う人間の自覚これらは現代人の感覚の中で素直に自覚しえないでありましょうか。浄土教の基本的基盤たる罪の意識の自覚の問題を解決する事は将来の当面の課題となるであります。あるエッセイの著者にすれば浄土教で云う罪がキリスト教で云う様な人間と云うものに焼つけられている原罪意識程強重でなく、修行精進により瞬間的にでもその罪がぬぐい去る事が出来る処になまぬるさがあり、真剣な罪への認識が出来ないのかも知れないと云い、又、法律的罪悪と混同して考えようとする傾向が強いのかも知れない。事実罪の人間だと認識するまでには長い宗教的回心を要するものでありましょうし、又苦悩のないものが懺悔する事も又難しいことでありましょう。

元祖は釈尊のは蜀、諸仏の証誠に従うべでおろかなる私のはからいを止める誠めて居られるのであります。又「煩惱のうすく濃きもかえりみず、罪障のかるきもさたせず、ただ口にて南無阿彌陀仏となえれば、声につきて決定往生の思いをなすべし。決定心を即ち深心となづく」(大胡消息)と我々は一声々に決定往生の思いをなして一声の内に我が罪惡生死の凡夫なることを自覚懺悔し一声の内に如来慈悲の救済をよろこび報謝し相統することこそ無上道があり清浄浄土への道がある。そこに疑心なき確信をもった「安

☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄 著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料二〇〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智 著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料二〇〇円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都千代田区飯田町一ノ二二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

心生活」があるのであります。これにつけても「智恵第二」「我れ聖教を見ざる日なし」と云われた博学多才の元祖が愚痴無知の法然房」として自覚せられた意識の転化してゆく過程を更に更に深く味って見ることがのぞまれ、そうした元祖の心理過程の中に現代に生きぬく我々が罪惡生死の凡夫としての自覚が味い得る様に考えます。浄土の信仰の出発点たる信機罪惡生死の凡夫への自覚があすの浄土教の確固たる「安心生活」の基礎であると信じて単にこれをとりに上げて見たわけでありませう。

インドのアーシラム

佐藤 良純

(大正大学助手)

先日、テレビで「世界の青年達……明日を造る力……」と云う二つのプログラムが放送されました。そのうちヨーロッパでは、ドイツとスイスの徹底した職業教育をうける少年達、アジアからは、インドのアーシラムに働く青年達についてのドキュメンタリーフィルムが特にその印象に

残っています。ヨーロッパの教育はひとまずおいて、インドのアーシラムとはどんな所でしようか？

アーシラムと云う言葉は、サンスクリットと云う古いインドの言語で、元来はインドの上層階級の人々が一生の間に経て行く四つの時期、つまり、梵行期（学生期）、家長期（一家の主人として家族を統率する）、家住期（家を出て森に退き修行する）、隠遁期（更に遊行、修行して悟りを求める）、の最後の時期を指す言葉です。今日でもこの順序を守って一生を過す人々が居りますが、今、ヒンディー語でアーシラムと云うと、同じ理想、目的を持つ人々が指導者の下に集り住んで、精神的にはより高い人格の完成を目ざして修行し、肉体的にはより健康な身体を作るためにトレーニングにはげんでいるグループとその道場を指す様になっています。グループと云っても小さきままでも、カルカッタのラーマクリシュナミッション・アーシラムは、広い土地を所有し、専用附属農場、牧場、病院、小学校から大学に到るまでの教育機関、インド文化研究所をもち、又、ガーンディーのアーシラムは、全インドに支部を有しています。南インド、ボンデイシェリには、オーロbindゴーシュのアーシラムがあり、ボンベイ近郊のロナウラにあるヨーガ研究所では、ヨーガを利用して肉

体的欠陥を発見し治療も行っています。

これらのアーシユラムでは、長老、指導者を中心に、老若男女が規則正しい日々を送り、学習、農耕牧畜、道路家屋の建設、教育研究、出版事業、彼らの信ずる教えを広めるための様々な活動などに従事しています。子供達も例外ではなく、学校が終ると、その分に応じた仕事に割当てられます、大きなアーシユラムでは、ほとんど総てのものが自給出来ます。つまり日本で云えば、一つの新しい村造り、町造りが行われているのです。ここに集ってくるのは、全インどの、すべての階層の人々で、ヨーガ研究所には外国人もおります。隠退した政府の高級役人や、東西パキスタンからの難民などおりますが、中心となっているのは、真にこの運動にひかれて入ってくる青年達です。どんな動機でアーシユラムに入ってくるかは、人によって異なりますが、ラーマクリシュナミッションの様に宗教的集団の場合には、その教えに対する信仰からと云うのが多く、ガンディー、オーロピンドのアーシユラムでは、それぞれの思想に共鳴してくる人々が多くなります。

つまり現代のアーシユラムは昔、一人乃至数人でヒッソリと森に住んでひたすら人格の陶冶にはげむ、と云った消極的なものではなく、積極的に外に向って働きかけると云

う、生産的、外向的な性格が強くなっています。更に注意すべきことは、これらアーシユラムの精神的なバックボーンとして、例外なしに伝統的なヒンドウー教乃至はヒンドウーイズムがあることです。これは前世紀に起った、アーリヤサマージ、ブラフマサマージ、更にガンディーのサチャグラハ（真理の把握）運動など、ヒンドウーイズム復興運動、即ちヴェーダに還り、インド本来の正しいヒンドウーイズムの上に生きようとする運動の進んで来た形とも云えます。ただ、前世紀の運動がインドの独立を大きな目標として来たのに対し、今日のインドでは、自分達の手による自分達の国の建設と、国民的統一が最も重要な課題となっているので、これらアーシユラム運動も精神的にインドを統一するための努力をしているわけです。

古代インドの仏教サンガは、僧侶、在家者一体となった和合の集団でありました。今日の日本に小さな集団の道路造りには必要ないかも知れません。しかし町をきれいにするなどの実践運動はすぐ出来ることです。そして仏教の教えをこれら実践運動のバックボーンとすることは、精神的に不安定な現代日本の社会を安定させるためにも大変に意義のあることではありませんか？

私の歩いた道

——主として婦人会活動への回顧——

須藤 和子

(清水・仏教婦人会理事)



願れば私の婦人会活動（広い意味での）への
遍歴も既に久しい。

P T A副会長時代の主として母親たちを対象とした成人教育、母親たちに呼びかけて作った町内子供会、眠っていた町内婦人会への積極的な働きかけ、そして今日、当市仏教婦人会を通じての些かながらの仏教運動と、一見その活動の場は異つていても、結局は家庭に生まれた私の、現在在家にあって猶心の

奥底に潜んでいる「寺族」としての自覚が、私をその様に鞭打っていたのかも知れない。

私が家庭を飛び出して一介のサラリーマンの妻となる事を希んだ時、将来は自分の社会事業の継承者になる事を望んでいた亡き父（中村弁康）がそれを惜んで「今はよい子供を生んでくれる様祈るばかりだ」と周囲の者に洩らしていたと聞いた。また、旧隣近去された真野正順先生（思えば先生御夫妻には学生時代から随分御恩になった。田舎者丸出しの女学生の私に、歌舞伎を観せて下さったり

支那料理を御馳走して下さいたり、また宿題の哲学史のレポートを持ちこめば即座に口述

して下さい、ほんとうに嬉しかった想出の数々は生忘れの事は出来ない。）も、父から相談を受け「今は本人の希望に任かせなさい。家庭へ入れば当分は育児に専念しなければならぬだろうが、或る時期に至れば、再び何らかの形で社会的に働き得るのではないか」と父を説得して下さったと聞いた。そうした周囲の方々の温いお心づかいに対する責任感が、無意識に私の心の一隅を占めていた様だ。

x x x

色々の婦人の集りの中で最もまとまり易いのは、何といつてもP T Aの婦人部である

う。

十数年に亘る私のPTA活動は、主として成人教育への関心にあった。お母さんがたは、こと我子の教育に関するとあれば、どんな無理をしても学校へ馳せ参じてくれた。私はPTAの本命は成人教育にあると信じていたので、大体月一回の割で講演会など持った。然し戦後学校へ宗教を持ち込むことはタブーとされていたため、何か換り所のない歯がゆさを感じていた事も事実である。しかし何といってもPTAの仕事は楽しかった。それに依って私達母親は社会的に開眼した。今まで台所にくすぶっていた主婦が、講演会に社会見学に意見発表にと、急速に成長して行った。そしてそこでは、夫の経済的地位は度外視され、本人自らの良識と誠意と実行力とが正しく評価された。

だが私は役職に少し長くとどまり過ぎたようだ。私はマンネリになることを一番怖れた。しかしやがて子供たちの成長と共に、PTA活動にも終止符を打ったが、当時の思出は今なお楽しく懐しい。

私の生活の信条は、いつも責任をもって、

せい一杯の努力をすることだった。

だが、女が社会的に何らかの仕事をしようとする時、そう厳密せが必ず家庭にくる。したがって、家族の理解と協力なしでは何事も出来るものではない。その点で私はたいへん恵まれていた。

× × ×

戦後娯楽設備の少なかった頃、私は付近の子供たちを集めて、幻灯会をやったりのど自慢大会をやったりしたことがある。映写技師は当時中学一年の娘たちがつとめ、やがてバトンは小学生の長男（現在慶大三年生）に渡され、解説は私の受持、フィルム購入は夫の仕事であった。勿論子供会など無かった頃のことである。

また婦人会長当時、町内の母と子がこそっと楽しいバス旅行をしようと、その財源捻出は町内会長を口説き落したこともあった。

しかし婦人会がいつまでも子供たちの面倒まで見切れなかったで、お母さんたちを動員して、遂に子供会の誕生にまで漕ぎつけた。一般の子供会世話人の多くが男子であるのに反し、私たちのそれは殆んど母親ばかり

であった。その後は町内子供会の生みの親として、子供のための映画会、バス旅行、親と子が共に楽しむ町内運動会、新年子供会などを催し、夏休みには毎朝起きぬけでラジオ体操会に参加し子供たちの面倒を見た。それもこれもみな、夫や子供の協力なしで出来るものではなかった。

私の幼い頃、まだ若かった父が自坊で毎日曜日子供会を開いていたのを想い出す。童話の上手な編輯義孝さんが、手振り身振りでおもしろ可笑しく「孫悟空」の話などして楽しませてくれたのを、かすかに記憶の底にとどめている。広い本堂は、遠方からも集ってくる子供たちで溢れていた。勿論ラジオもテレビもない遠い昔の話である。

昨今、仏教界にも、日曜学校開設を説く声がとみに大きいくと聴く。ラジオ、テレビ、映画と、このマスコミ時代に、果して寺院の呼びかけに応じて子供達が集ってくるかどうか多少疑問ではあるが、キリスト教会でやっている以上出来ない筈はない。

仏教がとかく老人のもののだけの様に誤解されている現状を打開し、お寺を若者たちの楽

しい集いの場となし、若者たちの心に仏陀の教えを浸潤させるためには、幼児の頃から寺院と密接なつながりを持たせる事が大切である。それには、寺院附設の幼稚園、日曜学校など最も適切なものと考えられる。しかし、それには寺院側には、余程の熱意と根気とが必要であろう。そこには採算を無視した「奉仕」のみが待っているからだ。

或人から、ロータリークラブの目的は「奉仕」だと聞いたが、私もまた、推尾匠匡先生

「心生き身生き物生き事も生き

人みな生きる共生きの里」

の教えを人生の目標とし、日常何事も「奉仕」の精神で貫くよう心掛けていた。

昔、父が寺の庭を子供の遊び場に開放し、ブランコや滑り台などを取りつけたのを想起こす。今しみじみと父の心が解る気がする。

x x x

清水市に仏教婦人会が生まれたのは、私の娘時代のことである。その頃、父は私財を擲って、東都から名僧知識を招き御別時や仏教

講演会または共生結衆などを開いた。推尾先

生や友松円諦先生が頻繁に来清されるようになったのは、先代鈴木様御夫妻が父の導きで熱心な仏教信者になられてからのことである。その頃の清水は、正に仏教運動の全盛期であった。市の有力者の多くが、鈴木様の御誘いでそれらの会に参加した。そして鈴木昌子様を会長として仏教婦人会が生まれた。高橋順次郎博士も来清、やがて仏教女子青年会が誕生、毎週仏教聖歌の練習などに励んだ。のち鈴木との若い社員を中心に結成された共生青年会も、雑誌の発行や聖典輪読会など多彩な活動を始めた。まことに仏法の華咲き匂う良い時代であった。

清水仏教婦人会は、のちに友松先生が名付け親となり「不二婦人会」と命名、鈴木昌子様御逝去のあと若夫人を会長に仰ぎ今日に及んでいる。

それとは別個に、全日本仏教婦人会のチエーンとしての「清水市仏教婦人会」が、仏教会の肝入りで新らたに誕生したのは、今から三年前である。静岡市公会堂で、静岡県仏教婦人会の結成式が行われた翌年の五月であ

る。

現在、静岡県仏教婦人会は、前会長木全かつ女史の後を継いで静岡市宝台院の野上みゆきさんが会長となっているが、その落着いた話し方や人をそらさぬ態度に、まさしく名会長の感が深い。県仏婦としては、年一回の県大会、幹部研修会、涅槃会の記念行事としての山本杉女史の県内巡回講演会、年二回の会報発行などであるが、他の行事は各地区の仏婦が思い思いに企画実行している。現在県下の会員数六千余。本年は伊東市にも新しく仏婦が結成され今夏八月二十九日には此処で第五回県大会が行われる予定である。

私も当市の仏婦結成に際し、是非手伝ってやってくれとの兄（中村康隆）からの申出に常任理事を受諾、昨年は第四回県大会の開催を当地で引受け、一千名近い申込みの整理に悲鳴をあげた始末であった。

目下私達の最大の課題は、どうしたら若い人たちを吸引出来るかという事である。

いつの場合も会場を埋める八割が御老人である事は、仏教がとかく老人のためのものと考えられ、「お寺の用はすべておばあさん」

で済ませ、若い主婦、青年、子供に浸透していかないからであろうか。

寺院がいつまでも古くさい抹香くさいやり方ばかりしている限り、若い世代はこれを敬遠する。何とか近代感覚にマッチした方法で若者を魅了出来ないものか。いつまでも御詠歌ばかりでは困る。東本願寺のコーラス隊に依る新作オペラの発表などは、積極的な進出として最も好感が持てる一つである。

私たちの会でも出来る限り抹香くさを避けるために、講演会の案内や夏季修養講座の趣旨書などにも努めて平易な言葉を使っている。(好んで難しい仏語ばかり並べたがる人があるが私は極力之を避ける。) 会合の際には意味不明の御経(失礼ご容謝)より仏教聖歌などの合唱をする。仏教講演会なども会社のホールなど借りて開催する(これに対しては異論もあるが、現在の段階に於てはその方が効果的である)。花まつり、成道会その他の記念日には、病院、母子寮、養老院などの施設を慰問したいと考えているが、遂にこれは本年も実現出来なかった。

更に、当市仏婦運営上の大きな痛となつて

いるのは、寺院の奥さん方の熱のなさである。「忙がしい忙がしい」で理事会にも出て来ない人。「仏婦などは余計の仕事でわずらわしい」と言う人。寺院婦人がこれでは、在家の理事さんたちの欠席を責めるわけにはいかない。

各寺院にそれぞれ所属の婦人会もあらうが、それらの小さな輪をつなぎ合せて、市仏婦、県仏婦、全日婦と次第に法輪を拡げ大きな活動力たらしめるのが、仏婦結成の目的であるから、今更小さな宗派根性など捨て去るべきである。

寺院がいつまでも安眠を貪っているから、創価学会などにしてやられるのである。

速かに寺院を開放せよ。お茶、お花、手芸料理、コーラス、ピアノ、バレエ、書道、何でもよいとえ自分に教える力はなくとも、お寺をその修養の場に開放し、出来れば自分も共に学びつつ、一般青年子女と肩を叩き合う間柄になりたいものである。

仏教会、仏教婦人会の前途は、まだまだ多難である。

仏教界にもっと斬新な若々しい息吹きをふ

き込んで、若い人々が喜んでお寺の門をくぐる様にしたい。若い人々に、いきなり難解な仏教哲学を説くよりも、「親しみ易い寺院」となつて、若人の足を寺の方向へ向けさせる事を先に考えるべきではないか。これは、在家としての私の切なる希望である。

x x x

与えられた課題「婦人会」とはやや縁遠い私的な思い出が多くなって申し訳ないが、寺院を離れて一般家庭人となった私の体験を通して、今後の寺院の在り方に対する要望の一端を述べさせて頂いた次第。何卒、失礼な放言の数々は御海客あらむことを。

(昭・三八・二・三)

広告の御相談は

「浄土」編集部へ

東京都千代田区飯田町一ノ二十一

法然上人讃仰会

「浄土」編集部

近代高僧伝

桑門秀我

大橋俊雄

神話と伝説の國、出雲平野をゆるやかに流れる神戸川のほとりの神門郡荒茅村に秀我が生をうけたのは安政六年五月一日のことであつた。父は今岡嘉右衛門、十歳のとき正法寺の達譽唯我の門に入つて其の弟子となつたが、

を叩き佐伯旭雅について俱舎を学び、二十年には宗門教育の大改革が行われた。

師唯我は策略家であると共に弁舌さわやかに人を引きつける力をもつていた布教師であつた。その後山陰きつての名刹神門寺、曾つては一条派の本山として名声をはなつた此寺に移住するにあたり、彼も師に随從して此處に移り、十九歳の時笈を負うて京都に遊學、西

全国を七大教区に分ち、教区ごとに宗學支校がつくられることになり、東京京都名古屋長野盛岡山口箱崎に支校が設けられ、後に大阪にも支校が設置された。更に尼衆校が東京名古屋京都大阪に出来、支校の卒業生は宗學本校に進む道が開かれた。しかしこのようにして完成された組織体系は極めて立派なものではあつたけれども、いざ開校するとなると教師がたりない。この上は教師の養成が急務であるといふことで、とりあえず師範科を設け教員養成を目的に學生を募集されたが、時に難関を突破し入學したのは秀我であり、一年間受學の後、二十二年九月には早くも宗學本校の助教授に任用され、宗衆を諷するよ

部大學林に入學したが、頭腦明晰な彼の學はめきめき進み、十三年七月卒業と同時に和歌山宗學支校の派出教師を命ぜられた。翌十四年京都支校に転ずるや、傍ら土川喜・太田密道・真野順戒・林弁我等と共に泉涌寺の門

うになつた。然し翌二十三年には愛知第四支校に転出、三十二年秋には校長となつた。この頃彼は野田の昌福寺に住していた。昌福寺は寺領を多くもつ三河屈指の道場で中本寺格、住職の恭愷がなくなつたあと、末山の寺院間で後住問題をめぐつていざこざがあつた。その争いたるや、寺祿の多いのを目をつけた名利のための争ひだつたので、容易に解決する道がなく、中に入るものがあつても却つて中傷をうける始末、時にこれを解決するといふことで晉山したのが秀我であつた。寺規が最しく戒律嚴持の寺庭に育つた彼は、三河に來住してから此の地方に淨土律を重んずる風があり、律制をのこしている寺院が少なからずある四囲の状態に刺激をうけ、律風を慕い服裝だけでもよいから僧風を維持したいと強く念願し、常に風衣を依用していた。これは独り彼にのみ止まらず武田芳淳、大鹿慈成もそうなら大門了康も同様、いはば支校在職の諸師たちの間に行われた一つのはやりでもあつた。其の上彼は温厚篤実な清僧として人々のうけもよかつたので、幸い推されて昌福寺の特選住職となつたのである。時に三十

一年八月のこと、以来五ヶ年の間寺門の興隆につくし、三十五年四月には後を渡辺善成に委ねて身を引き、師範神門寺の住職となった。

彼は茶道は千家表流を、花道は千秋流をたしなまれた趣味の人であり、花道は秘伝をうけて諸国總會頭の肩書をもっていたという。

何事をするにしても熱心であった彼は、最後

まで追求せねばやまないという

熱烈もえるが如き信念をもつて

いた。これが宗学を究め、俱舎

を学び、茶や花の蘊奥をめ究め

ねばやまぬという強い信念とな

って現はれたのである、開基は

余り上手ではなかったが、京都

鹿ヶ谷に在った専門学院にいた

頃、彼は授業がすむとよく大鹿

愍成の部屋をたづねて暮をう

ていた。時には華嚴の学匠山本嚴識も参加し

て打たれたこともあったが、彼は「拙僧は黒

石は嫌いだから白石をもたせてくれ、その

代り何目でもおくサカイに」といって笑はせ

たこともあり、何かの祝賀の席に割笏をうち

流暢に、しかも上手に三河万歳をやられたこ

ともあったという程のすぐれた余技の持ち主でもあった。

その後三十三年には愛知支校長から専門学

院教授となり、四十四年には宗教大学に転

じ、大正四年には銅路の大成寺に住していた

曾っての同窓加藤秀旭を呼んで後任と定め、

彼は飄然と出雲に帰国してしまった。一時寂



徳女学校長にもなり、又宗務に出て執綱にな

ったこともあったが、学徳のはまれ高かった

彼は昭和五年無承認のまま推され、遂に一宗

選挙の結果百万遍知恩寺の法主となったが、

固辞して受けず、また岩井智海が増上寺から

知恩院に昇進されたあと、増上寺法主にかつ

ぎだされたこともあったけれども、何として

もうけられなかった。それというのにも彼には

当面の問題として自坊の復興という大業をか

かえていたからに外ならず、親しい友人にも

「本山法主になるなんて嫌だ、それとも岩井

さんのように間もなく管長になるというなら

ばだ……」と冗談めいたことを言はれたこと

もあったが、再三にわたって受けることなく

固辞しつづけられたのは広大な寺域と宏壯

な建物を擁する出雲の名刹神門寺の大改築を

計画していたからであつたろう。

一身を犠牲にし、身をもって学問の道を歩

みつづけた人は少ない。その少ない人のなかに

秀我がいた。ことあるごとに宗書を手に

し、念仏精進のうちに宗乗を学んだ。二祖三

代の宗風を堅実にまもり、法然上人の再来と

仰がれた彼は、昭和十年六月喜寿の賀を祝す

るにあたり、門弟たちの手によって東西宗要

の例にならい、「出雲宗要」が上梓されて宗

乗学者の晩年をかざるにふさわしい祝賀をう

けられたが、同十四年三月六日突如八十一歳

をもって浄土に旅立たれた。法名を明蓮社鑑

アメリカ旅行

佐藤 治子

ジヤングルガーデンとフラミンゴ

ネーブルスを朝十時半に出てメキシコ湾に沿って北上すると一五〇マイル走った所に、サラソタと云う町があり、そこにジヤングルガーデンがある。入場料を払い中へ入る。温室や熱帯植物の植え込みを通りぬける。ワニがいる池やインコの曲芸をみせる小庭園を通る。ハイビスカス（日本のムクゲと同じ）の美しい大輪の花が小径にそって咲いている。まっかな色は熱帯地方独特のあざやかな色彩である。とき色やクリーム色とまことに美しい花である。ヤシの木も百種類もある。小径について植物の生い茂る中を通りぬけると広い庭園に出る。所々に池があって何か彫刻されたようなピンク色の鳥が沢山池に立っている。

11.



ジヤングル・ガーデンの庭
内のフラミンゴ。マリオン

る。そつと近づいてみたがにげようとしな
い。ジエネバがフロリダへ行くとフラミン
ゴを見られると話されていた。それがフラミ
ンゴと云う鳥なのである。

ヤシの木とハイビスカスの咲きみだれる下
の池にピンク色のフラミンゴは絵のように美
しい。ベンチに一人婦人が静かにこしをかけ
ている。広い芝生に放し飼いのクジャクが数
羽遊んでいる。よく手入れされている庭。私
はマリオンにこれは州が所有しているのか町
のものであるのかときいてみると個人の所有

と云う。子供がいても花をつまんだり鳥をお
いかけたりしない。鳥が悠々と芝生や池に遊
んでいる。私達人間の方がそれをさまたげな
いように静かに歩るいて行く。

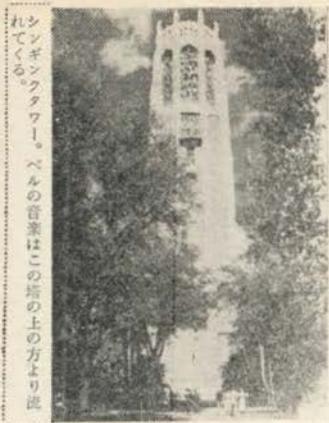
広い庭に働らいている園丁は一人しかいな
い。インコの芸をみせる係りの小父さんと切
符売場に三四人立っていただけである。境内
管理に努力する家の者達の事や、「枝を折ら
ないで下さい」と立札をかけなくてはならな
い日本を思い出さないわけに行かない。もつ
ともここは遠い南国の一小都市である。見物
人も少ないせいかも知れぬ。だんだんと公衆道
徳と云う事について考え込むようになってし
まった。

十九日の夜はマリオンの仲よしルースの家
へ泊めて頂くことになっている。マイアミか
らタミアミトレイル、ネーブルスをそしてこの
サラソタまで国道十四号線を通ったわけでこ
こよりフロリダ州の丁度まん中にあるウイン
ターヘブーンへは間道を通る。フォートメード
と云う町は黒人が沢山いた。黒人部落を過ぎ
るとオレンチ島ばかりでグレーブフルツが
枝もしたわになっている。この実をもぐのは

大仕事であるから黒人達が働くのであろう。

小供は皆がわい。黒い顔でも目がクルクルして生活にゆとりがあるのか笑い顔も明るい。見渡す限りのオレンヂ島の間の道路を私達を待つルースの家へついたのは四時頃であつたかしら。私達が庭の横へと入り車が止まるとルースそして子供さん達が「ステープだ」とび出して来た。マリオン名の事を名字のステフンソンからもじってステープとマリオンの学友はよんでいる。マリオンとルースとはカレッジで一緒に過したので、家中でステープと愛称をつかう。

プールもある広い邸内の一部にある二階建ての別棟に私達の三泊する部屋が用意されて



シンギンクタワー。ベルの音楽はこの塔の上の方より流れてくる。

いて、「治子がアメリカへ来たなら」と家族中で旧友マリオンと私とを待っていて下さったので着いたとたんになつかしいような気持ちになりルースと固く握手したのである。

サイプレス・ガーデン

このウインター・ヘブンはいくつも大小の湖水がある。翌朝ルースに案内されてシネラマで日本の人達にも知られているサイプレス・ガーデンの水上スキーをみに行つた。まるで海岸の様に思えるほど大きな湖水の水辺に近くベンチが沢山設けられてあつて、見物人がある一杯こしかけてショウの始まるのを待っている。美しい音楽に合わせ十人位の若い女人達の水上でのおどりや男の人の水上スキーの巧みさ、そして間におどけたいでたちのコミックの一こま等々で一時間余りはたちまちすぎる。

その後、美しい庭園へとみちびかれる。湖水の中から大きなサイプレスの木々が生いしげりリスバニッジモスが風に吹かれていて美しい。樹令百年もすると云う木々が水中より高く生ひしげっているのは珍らしいもので

あつた。その間を小舟にのって行く見物人もある。ヤシの木、ハイビスカスの生いしげる木の下かげの小径を歩るいて行く。ランの花が歩いて行く私達の頭の上の方に咲きほこっている。苗木ばかりまとめてある所には「樺日本より」と立札がしてあつた。種類も色々集められてゐる。こんな所に椿がと思ふとなつかしい。ここでも又どこか経営しているかしらとマリオンにきいてみた。「治子はよほど気になるらしい」とマリオンは笑い乍ら個人のものとして説明してくれる。

やはり個人の所有であつた。外へ出ると駐車場には数え切れない位の車が何列にも並んでいる。水上スキー見物を楽しみ美しい庭園と南国特有の色とりどりの花に目をはる私は花に手をふれようともしないで觀賞している大勢の見物人の態度にも羨ましいな、公衆道徳の点で日本は未だ未だだと思わないうちはいらなかつた。

クックアウト（野外科理）

マリオンの友人達或いは私の古い友達の御宅で次々と御食事に招いて下さった時、どこ



の御家も御主人が食前の飲物を一人々々に好みをきき乍らそれぞれに作って下さる。肉を自ら切り、とり分けて下さったりホステスの夫人を助けて中々男の方の接待ぶりは大したものである。

大きな肉のかたまりを長時間かかって焼くのを御主人が自らして下さった方もあった。野外科理は日本でも出来る事であるけれどルース家でもてなされたものは一寸真似の出来ぬものであった。

ルースと御主人のトミーとは三月位からもし私を招く事が実現したらとマリオンとこの野外科理をすることを計画していたと云う。シニルハムモックと云う四十マイルも離れて

いる人一人いない場所へ車に道具、食糧一切をもちこみ出かけることになった。丁度私をアリゾナからサンフランシスコまで連れて行って下さるはずのデヴィス夫妻もワシントンからフロリダへ見え、ルースの家へ訪問された時なので私達一行に参加された。トミーと高校生デミ・小学生のパッドそしてルースの姪のバーバラも交り家族はタイトのズボンにシャツをきて男の人達はつば広の帽子をかぶり馬へでものりそうないでたちである。

私達は二台の車に分れてのった。オレンヂ畠を四十分も走ったと思われる頃ようやくくして目的地へついた。すすきをふみ分け道もない様な原へゆっくりと車は入って行った。大きな枝を四方にのびた木々にスバニシモスが地上すれすれにたれている。

車を止めた所はトミー達のよく来る場所らしく、トミーはテーブルを皆に手伝わせ車よりおろしたり、ルースは食糧をおろしたり忙がしい。大きな森にスバニシモスが風にゆらぎ曠野の西にかたむいた太陽が実に大きくみえる。美しい曠野の入日である。男の人達四人はたき木集めにちって行った。

私達は大きなふくろをもつてグレイズフルーツを「無断で頂きましょう」と笑い乍ら果物をもぎに出かけた。この土地はトミーの友人の持地所とかでトミーは入ってクックアウトとしてよいし自由に果物もいであつたのである。ズボンをはいいたバーバラは木へのはって行ってフルーツをもいでは下へおとす。「ズボンをはいていればよかったのに」マリオンに云うと「治子がちゃんと滑物をきているのにズボンなどはけますか」とやりかえされる。私もモンベをもつて来るんだつたて皆で大笑いし乍ら草の上におちて来るグレイズ、アフルーツを「頭へおとさないでね」とキャアキャアひろつたりにげたり大はしやぎである。

たき木が山とつまれている場所へえものグレイズ・フルーツの袋をもちかえった私達はトミーが火をたき大きな鉄のあみをのせ肉をやり出すのを椅子にかけたリクッションにすわたりしてみつめている。うす暗くなつた曠野の近くのこの森にたき火の灯りでスバニシモスがあかりに照し出されフエリランダの様に思える。テーブルで何かしていた

ルースが「治子お茶よ」と私を呼ぶ。コーヒーや紅茶までもって来ている上、お茶好きの私に台所へおいてあったゆのみ、急須をいつのまにかもって来てくれたのである。思いがけないお茶がここでのめるなんてルースの細かい心ばりにおどろき、感激してしまふ。

その上、私がつと感激させられた事はトミーとルースにうながされジミーとパッドはハモニカをとり出し肉をやくトミーのそばでハモニカを吹き出してくれた事である。二人の坊っちゃん達まで日本よりのお客をもてなしてくれているのである。楽しい夕食がすむと帽子に懐中電灯をつけトミーとジミーそしてパッドは立ち上った。トミーは銃をもち出してこれから兎をとって来て見せて上げると云う。(トミーは銃を所持する許可をもっている)森の中へ三人は行ってしまった。デヴィスさんがたき木を次々とくべ私達は雑談は雑談に余念がない。折から月が登って大樹からベールのようにたれ下っているモスが月の光の中でゆらゆらゆれてその美しさはたとえようがない。所々にたれているのでなく森全体の大樹の森にベールのようにしかも高い枝

から地上すれすれにたれているのである。異様な美しさである。バーンとどこか森深く銃の音がする。

やがてモサモサと草をふみ三人がかえって来た。一匹の兎をぶらさげてこ。んな珍らしいクックアウトとは考えてもみなかった事であった。月は高くなって夜も更けて行った。再びテーブルや椅子を車へもち込み火を消して車へのりこんだ時には小学生のジミーはいつの間にか一人で車の中へ入りこみねてしまっていた。素晴らしい森の中のデイナーであった。

シンギング・タワー

朝ねをした私達が朝食兼お昼食を頂く頃、トミーは私をカヌーにのせると云って仕度にな余念がない。ジミーは日曜の事とて教会からかえった所であった。信仰が厚いジミーに上げた仏教の本を牧師さんに見せた所「是非会いたいと云ってましたよ」と云う。新聞記者がインターヴューに来るがかわらないかとルースにきかれる。やはりこの地に来る日本人は珍らしいのかも知れぬ。到着した晩にも何人かの人が会いに来られた。こう云う時はや

はり日本の一寺院の主婦と云う責任に背中をシャンとさせられてしまふ。そうりからかとが少し出るのがおかしいと外国の人は不思議に思うらしい。その話が出た時かとうとそうりをふむので歩きよいのでそこへ力がかからない大きなそうりでは足が疲れるとそうり屋さんと話合っていた事を説明すると会いに来られていたお医者様が確かにそうであるとなづかれた。又お人形の帯がほどけてしまつて結べないからとお人形同伴で訪問される人もいる。日本舞踊に心得のない私には難題であった。でも何とか結びなおして上げた。女ばかりの話を飛び込んで来られ「私はお医者ですかいいでしゅう」なんて云うドクターも居られ中々にぎやかな毎日であった



サイプレスガーデンの水上スキー。湖上にて

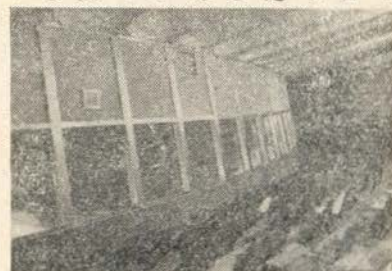
さて、三日目の午後ルースの車でオレンヂ島の中にそびえるモザイクで作られたバックス・タワーへと向った。小高い丘の上に塔は見えていても中々遠い。此の塔を建てたバックス氏は「レデイス・ホーム・ジャーナル」の主幹をしていた有名な人で退職後この地に住居を定め「アメリカのタジマハール」と云われる世の人の為の心の休息所であるシンギングタワーを建てる事に成功されたのである。ルースのドライブで高い塔を遙かに眺め乍らオレンヂ島の中の道を走って行く。

門を入り暫く走って駐車場で車を降りる。

三時になるとその塔の上におかれたベルの楽器から美しいメロデーが流れ出て来た。三々五々と人々が静かに歩るき乍らきいている。塔の前に長方形の池があるだけで周囲は樹木が生いしげっている。その木の下かげにベンチがあちこちにおかれこしかけて音楽をきいている人もいる。遠くにはオレンヂ島が一望に見えるばかりである。ふと私の前をカーキ色のシャツをきた人が私をみては歩るいていく。ふと気づくと立ち止ってでもいたのか今度は後からついて来る。変だなと思ったが悪

い事をしている

わけでないから
平気でいた。音
楽は五分位して
止まり、又一定
の時間が来ると
又鳴り出すのだ
そうである。メ
ロデーは止まっ
た。ところが又
すぐ鳴り出し
た。ルースとマ



ワイケケ教会の中
ヨウをみる劇場内部

リオンはオヤと顔を見合せている。又一休みするとすぐ続いて色々のメロデーをきかせられる。二人はますます不思議と「きつと器械でもなおしているのかも知れない」などささやいたり、「これは素晴らしい！」と三人で顔を見合せ静かに歩るいていた。かけ廻って遊びたい年頃の子供達も親達と一緒に静かにしている。オレンヂ島を見下ろせる所のベンチにこしをおろし鳴りつづける音楽に耳をかたむけ約一時間その静かさと美しいメロデーに別天地にいるかの気持ちにとらわれてい

た。

いつの間にか守衛も見えなくなり、そんな事も忘れてしまっていた。バックス氏の理想通り静けさとその音楽により心が清まる一時間であった。その夜ルースの御宅ヘイナリーに招かれ私達と一緒に御食事をされた一人の婦人から思いがけない事を話されたのである。それは昼間の音楽の話が出るとその方は「あたりまえですよ。貴女の為に特別に奏せられたのですよ。」と云われた。三人ともびっくりしてしまった。その方は「貴女がもし日本の着物をきていなければ日本の人と分らなかったかも知れない。いつも他国から見えた人らしいと分ると特別に音楽を奏するので」とつけ加えられた。何と云う倅せであつたらう。何と云うあなたかいてもなしであらう。それで私の前後に立ったりして私をみて明らかに他国人の訪問者と見定め、その事を係りに告げ音楽を一時間に渡ってきかせてくれたのである。しかも一言も云わず、そしてぬ態度で無言の内に私の為ベルから流れ出る音楽に一時間もたのしませてくれたのである。庭園を静かに消遙している私達三人をそ

つとしてくれたその心づかいに私は勿論、マリオンもルースも深く心を打たれたのであった。私は御礼の言葉をルースにたのみ、マリオンはニューヨークへ戻ってから「遙々と来た私の友人の為に下さった厚意を深く感謝する」と云う事の一文を秘書にタイプさせ送ったのである。見知らぬ人、しかも田舎と云える位都会より遠い所でつくされたあたたかいいもてなし。これがバックス氏の理想であり今もなおその意にたいしアメリカの人達にも又特別の訪問者、再び来る事はないであろう他国の人達にも緑の樹々にかこまれ色とりどりの花を咲かせそして塔のうつる前庭の泉のほとりを歩んでいる間、すみきったベルからかもし出される音楽で心を清めてくれるのである。知らない人々からのあたたかい、そして忘れる事の出来ぬおもてなしであった。

シエルター（防空壕）

ルースの御主人トミーはボーイスカウトの世話をしたり子供の教育に熱心で町の有力者である。カヌーを作る事は特別上手らしい。私をのせると云って準備している時、ラグビ

一部の学生がけがをしたと云うニュースに飛んで出て行かれ計画はお流れになってしまった。さていよいよウインター・ヘヴンをたつ朝是非みてほしいとシエルターへ案内された。ソヴィエトが丁度核実験をすると云う事でアメリカの人達は異状な関心を示していた。外からみると細長いシエルターへ家の中より階段を下りて入って行く。壁にとりつけられてベットあり、本だなあり、御不浄ありで暫くここへ避難するだけの準備がしてある。「どう思うか」とトミーにきかれる。「電気は」ときくとしや断されても自家発電出来るようになってい



ウイキワチの水の中シエロ

知識がないから口出すべきでない。

アメリカ全土でいざと云う場合このシエルターへ一時避難するべく各自が用意されるべきものである、と云っても費用は並大抵のものでないらしい。中へ入って居心地よく家族が一時しのげる様になっている所をみて、外へ出て認識を新たにして、部厚くはりまわされた石の壁をみるのであったが、やはり何と云っても心業しいものではない。「方々にシエルターが作られているようですが、みて来られましたか」と帰国して一番先にこのシエルターをきかれた方がいた。

私のみせて頂けたシエルターは、フロリダ州の真中の小都市である事を考えると大都市より遙かに遙かに離れているとは云え、アメリカの人達の時事問題の推移にびん感な事は並大抵なものではない。日本人はのんきだと云われた方がある（東京在住の米国婦人）私はそうではないと大いに反ばくした。最大の悲劇を味わされた日本国民である。いざと云う時の覚悟はもうすでに出来ているはずである。アキラメに似たものだと話した事がある。シエルターを見て頂けた事は実に有難

かった。と云うのはこのシエルターは私が長い旅行中みる事の出来た只一つのものであった。

水中シヨウ

ウインタヘヴンはフロリダ州の真中にあり、それより再び北上し乍ら西海岸の近くのウイキワチスプリングと云う泉へ行く。この辺は泉が多くシルヴァースプリングも有名である。ウイキワチスプリングでは世界に誇る。

一つまちがうと非常に危険であると云う水中シヨウが見られて、トミーが是非みるべきものとすすめたものである。泉の中の一部をしきりをして自然の岩石を利用し若い男女の数人が音楽に合せ水中でダンス曲芸をみせるのである。階段をおりて戸を開けて入ると私はとたんに胸が圧迫される感じがして苦しくなった。

観客席の正面は大きなガラス張りになっていて、水が満々とみちている。のぞくと表面が天井の高さ位にのぞける。表面より十四フイートの下の水中でシヨウをみるのである。席にこしをかけると美しい音楽が流れ酸素の

クダの付いたマスクをかぶり水着姿の女の人達がゆらりゆらりとメロデーに合せ出て来る。小さいお魚が泳いでいる。日マワリのような花が何本か生えている。よく見ると酸素の管がとりつけてあって、時々そこへ近づくとそこから管をとり口へもって行くのである。

岩から岩へロープが張ってあって綱渡りもする。足には平たい水はけをはいている。

いつの間には息苦しさを忘れて感嘆の声を放ってばかりいた。マスクをはずしてニコヤカに笑い乍らゆらりゆらりと観客席へ近づいて来る。マスクをはずしている間二三分もいやもつと長かったか知らぬ。こちらが又息がつまりそうになる。岩のかげにあちこちに酸素の管がとりつけられているのをとり出して口へもって行く。一人二人と岩かげへかくれる。今度はコミックが始まる。実にすばらしい芸である。シルヴァースプリングでは舟底にガラスが張られ下をのぞくとこのシヨウと同じものを見られると云う。この観客席など素晴らしいもので普通の劇場の様な席が設けられてある。正面がスクリーンでなく、観客席

がとりまいている全面がガラス張りである。

一時間位もみていたかしら。音楽が終って人々が立ち上り出した時、フーと大きなため息が出てしまった。きけば一分間に十萬ガロンの水が湧き出ると云う泉の中の息もつがせぬシヨウの連続、私は肩に力を入れていたらしい。肩をぐっとそらし大きく息をし乍ら立ち上ったのであった。外へ出て改めて泉をみる。大した大きなものでない。やしの木にかこまれた泉の向う岸に向って白い屋根が大きな貝のような形を水面にみせているだけである。大したものであるとして他に言葉がなかった。シヨウをみせた人達が水中より顔を出し次々と水から出て来て、楽しそうに何か笑い乍ら控室の方へ引き上げて行く。水中でシヨウをみせた人達よりみていた私達の方が疲れてしまったようだった。

漢方の相談に応じます

彦根市元岡町

医師 木村 集造

御法語をいたたく

人目をかざらずして、往生の業を相続すれば、自然に三心は具足する。たとえば葦のしげま池に、十五夜の月のやどりたるは、よそにては月やどりたりとも見えねども、よくよくたちよみてみれば、あしまをわけてやどるなる。妄念のあしはしげけれども、三心の月はやどるなり。

(諸人勸化の御詞)

人前を飾るようなことをせずにお念仏を唱え続けてゆけば、それは立派な念仏行者というものです。十五夜の月が暗々とかがやいていても、葦が一面にしげっている池には月がうつっていないように見えますが、よくよく近ずいてみれば、葦の合間にはまさしく月が宿っています。それと同様に心が迷い乱れ、いつもよからぬ思いに満ちている人であってもよくよくみると、やはり誠実な真心というものがあるものです。

往生の業とはお念仏を唱えることです。三心とは深く一途な誠の心のことです。従って

三心具足のお念仏というのは、心に阿弥陀さまの本願を深く信じ、口に南無阿弥陀仏と唱えることです。

これを逆に申せば、お念仏を唱える人はこうした素直な生一本の心を持ち続けて暮しているのだといえます。日常の生活に、社会での交渉や取引に、すべての人がこうした気持ちで相手に接し、物事を処してゆけるものであったら期せずして世間は明るく楽しいものになってゆきます。

それなのに実際は悪事が横行し、暗いかげに覆われています。人は互に反目し、疑い合っています。そして自分だけは勝手気ままな行動をし、他人に迷惑をかけることすら平気でいる仕末です。しかもこれが自由社会なのだと思ひ。平和社会だと称しています。反省のない、混乱はここから生れてきます。

お念仏を唱えるのは信仰の現われですが、一人でも多くお念仏を唱えるようになれば、自然に正しい社会が築かれてゆきます。妄念に満ちた自分たちですが、よくみれば心の中に三心の月が宿っていることに気がつきます。お念仏がそう気づかせてくれるのです。

リメンバー・三河島

「光陰矢の如し」で、昨年五月三日に起った三河島の国電・貨車衝突事故から一年が過ぎた。しかし、現在常磐線を利用して人達の中で、幾人がそのことを意識しているであろうか。

毎日紙面をよぐす事故の頻繁さのためにかえって、自分だけはそのようなことはないだろうという自己欺的安心感と取り換えられている。宗教的生死についても同様なことがいえる。



東京・三河島 浄正寺

三部経の再発見

(四)

如来の仏格

街を歩いているとき、部屋に独り有的时候、一日の仕事を終えて床についたときひとりにて念仏がでてくることがあります。そのときには、阿弥陀如来さまが、私のところへおいでになっておられるのだと思って、無上の喜びがわいてまいります。

私は三部経を読んで、阿弥陀如来さまの完全無欠の御仏格を知りました。

阿弥陀如来さまこそ、仏さまの中の王であらせられます。三部経の中には、よくよくそのことが示されております。

須藤隆仙



本仏としての如来

まず三部経には、阿弥陀如来さまは、『本仏』である、と示しておられます。

本仏とは、一切の根本となる仏さまで、たくさんおられる仏さまの中の根本身をいうのであります。

観經の九觀に「無量寿仏を見たてまつる者は、即ち十方無量の諸仏を見たてまつる。無量の諸仏を見ることを得るが故に、諸仏現前に授記したもう」とあります。『授記（じゅき）』というのは、仏さまが、私の未来のことを保証してくださることをいうのであります。阿弥陀如来さまは諸仏の本

仏ですから、阿弥陀如来さまを見たてまつることが、イコール諸仏を見たてまつることになるのであります。そしてそのためにこそ、諸仏は私の未来の幸せを保証してくださるのであります。

大経には阿弥陀如来さまが本仏であらせられることを、一そう尊く説いておられます。

「乃往過去」というのですから、遠い遠いとても数えきれない遠い昔であります。「久遠無量不可思議無央数劫」ともいいますから、むしろそれは、数えることのできない昔であって、始めのない時間、無始の時間、無始の永遠をいうのであります。錠光如来という仏さまをはじめとして、つぎつぎに五十三の仏さまが、おでましになり、五十四番目に世自在王という如来さまがでられて、この世自在王如来のお弟子が法蔵菩薩、すなわち阿弥陀如来さま、ということになっていくのであります。

そうしますと、阿弥陀如来さま、つまりここでは法蔵菩薩として出てまいりましたこの仏さまは、無始の永遠の中に出現された仏さま、つまり無始を本体とされた仏さまなのであって、錠光如来以下五十三の仏さまが現われ、五十四番目に世自在王如来が現われ、五十五番目に阿弥陀如来さまが現われた、というよりは、無始の本体が錠光如来と現われ、五十

三仏と現われ、世自在王仏と現われ、阿弥陀仏と現われた、ということ、宇宙の大真理が、阿弥陀如来として顕現されてくる。その道程に法蔵菩薩が説かれてきたわけで、ここでは、無始の本体から阿弥陀という、私たちを救う仏（報身仏）がでてくる、そこが大切なところであると思うのであります。

ですから釈尊が、大経で法蔵菩薩の御因縁を説かれたのは、無始の本体から阿弥陀如来さまが出てくる、阿弥陀如来さまというのは、無始の本体である、ということ、私たち凡夫に体感してもらうために、説いてくださったのであって、阿弥陀仏は久遠（無始）の本仏であるというのが、大経のこの部分の本義なのであります。

法蔵菩薩の本体

それですから阿弥陀如来さまは、法蔵菩薩から阿弥陀という仏さまになられた、というのではないのであります。それ以前から、もっともつと昔から、いわゆる乃往過去久遠無量不可思議無央数劫からの仏さまで、この久遠の阿弥陀仏が、逆に法蔵菩薩と現われて、そしてさらに凡夫と直接つらなる阿弥陀仏・と開かれてくださったのであって、法蔵という菩

薩が仏さまになったのではなく、仏が法蔵という菩薩になって、そのことにおいて、一そう私たち凡夫に慈悲の本体を示してくだされた、ということなのであります。

その証拠に、法蔵菩薩が世自在王如来のみまえて衆生救済の発願をしたとき、世自在王如来は、『汝が修行するところの莊嚴仏土、なんじ自らまさに知るべし（修行する浄土の莊嚴は、すでに知っているであろう）』と仰せられた、と大經にかいてあるのであります。法蔵菩薩がもしこれから、はじめて仏になるのですしたら浄土の莊嚴など知るわけがないのですが、法蔵はじつは仏さまで、決してこれからはじめて仏さまになるお方ではなかったので、世自在王仏はそういわれたのであって、法蔵菩薩とは右の如く、すでに遠い昔からの仏さまなのであります。

釈尊と阿弥陀仏

このことは浄土三部經以外の他のお經にも、釈尊が説いておられます。

たとえば、法華經などの中にも、三千塵点劫じんてんという久遠の昔に、大通智勝如来という仏さまがお出ましになり、その仏に十六人の子がいて、十六番目の子が釈迦如来であり、九番

目の子が阿弥陀如来である、と説いているのであります。すなわち阿弥陀如来は釈迦如来の兄である、というのであって、これは法華經の化城喻品けじやうぶというところにてでくるのです。それが法華經のもっとも大切な部分、寿量品にきます。と、釈迦仏は久遠永遠の本仏である、ということが強調されてくるのであります。このことは、弥陀釈迦一体であることを教えているのであって、弟としての釈迦仏が永遠の仏、久遠の本仏であれば、兄も久遠の上をいく仏であって、どちらも久遠の生命体ですから、それは一体であります。そしてこの一体は、やがて、インドにお出ましになられた釈尊は、じつは阿弥陀仏が釈尊の姿となって出現されたのだ、ということとをまで、私たち凡夫にさとらしめてくれるようになるのですが、その詳細はあとで述べることにして、ここでは、法華經の中で強調している、この阿弥陀如来の本仏の理、久遠の釈迦仏の、そのさらに上をいく兄貴分としての阿弥陀仏の本体の尊さ、それをつくづくと有難く熱信するのであります。

十劫の意義

ただここで注意しなければならないのは、久遠永遠の昔からの仏でありながら、何故に十劫正覺（十劫の昔に仏になっ

た) といつて、成仏の始めを限定するかということでありま
す。

すなわち阿弥陀経などには、「阿弥陀仏、成仏よりこのか
た、今において十劫なり」とあるのであります。すると十劫
では久遠無始ということにはならないではないか、という疑
問がでてきて、日蓮聖人などはこのところが理解できず、
阿弥陀仏は末仏(本仏の対)であり、權仏(実の対)である
といひ、その流れをくむ日蓮正宗(創価学会)でも、仏立宗
でも、みなこれを浄土教攻撃の材料にしているのでありま
す。だがこれは大変な誤りであります。

法華経では、寿量品の中で、釈尊が、自分はいまはじめて
仏になったのではなく、遠い遠い久遠の昔からの仏なのであ
る。という、いわゆる本仏の理を明らかにされたことを『開
迹顯本』といつております。いま阿弥陀仏が十劫正覚であ
る、というのも、十劫の昔に開迹顯本した、ということなの
であります。開迹顯本とは、仮りの体(迹)を開いて、本
(体)を顯わしたということで、釈尊がインドに出興して仏
教を説かれたのは、あれは仮りの体(迹)で、本体はそれ以
前からの遠い仏であるというわけであります。

同様に阿弥陀如来さまも、十劫の昔に法蔵菩薩という仮り
の体(迹)を開かれて、無量寿仏と本体を顯わされたのであ

り、釈尊は法華経を説かれたときに本体を現わされたが、阿
弥陀如来は十劫の昔に本体を現わされたのであって、十劫正
覚とは十劫始成仏ではなしに、十劫開迹顯本なのでありま
す。ですから法蔵菩薩が『無量寿仏』になられた、というの
であつて、無量寿仏とは、本体であり、法蔵菩薩は迹身であ
ります。釈尊がインドで成仏し、法華経で開迹顯本された、
そのもつともつと以前、十劫も前のときから阿弥陀仏は開迹
顯本されていたのであり、そのことを大経は真説しているの
であります。

◆ 浄土トラクト ◆

葵ぐさ

——御法語の栞り(その二)——

村瀬秀雄 著

B六版・十六頁
定価十五円 十円

目次

- 一、自身は凡夫なり(わが身わろして)……………一
- 二、漫心は悪魔に同じ(わがちからにて往生
する事ならば)……………四
- 三、念仏に差別なし(あの阿波介も)……………六
- 四、罪人ながら往生す(罪人は罪人ながら)……………八
- 五、生涯弛まむ努力(ある時の給はく、あは
れ此度)……………十
- 六、念仏のご利益(およそ五種の嘉誉を)……………十二
- 七、学生と念仏(学生骨となりて)……………十四
- 八、あとがき……………十六

表紙の写真

東鑑・天龍山 第三洞浮彫（砂岩）

河原にある石ひとつを取り挙げて眺めていると、いろいろなイメージが石の模様と重なって、石がさながら息吹きをしているかのよう

に感じられることがある。ましてや、その石にみ仏の像を刻みこもうとした人たちは、ただの石ころとはよもや感じていたわけではなからう。石のみ仏を見て、微笑みを浮かべたり、手を合わせるに至っては石の生命とでもいうものを考える。古来の歴史は文化の栄えた民族に実にすぐれた石の芸術を残してくれた。

中国に仏教が栄え出した南北朝の頃、石の芸術も開花した。ここに示した浮彫りは皮肉屋な爺さんとして知られる維摩居士の像である。方丈の部屋の寝台に坐って見舞いに来た文殊たち多くの菩薩、舍利弗たちの声聞と会い、こっぴどくやりこめる維摩。いかにもその眼は相手の隙をねらい、即刻切りこもうとしていながら、笑いとにくめないペーソスすら感じられる。その手法は中国的なものであ

るが、維摩の人をくったような、それでいて永遠の真実をも見つけているような風貌を巧妙に捉えていてすばらしい。石に刻んだ稜線がとくに生き生きしている。やはり、当時の代表的作風のひとつであらう。

維摩は仏教の真実なるものを聞かれて一言もいかなかったのだ、維摩の一點雷の如くして知られているが、そのへの字型の口元の特徴もまた心にくく描かれている。それにしても「衆生病むが故に我もまた病む」と宣言した維摩の心情は忘れてはならない警句である。ともに苦しみ、ともに悩み、ともに力づけあう世界こそ、いま強く要請されていることであり、弥陀の大悲に浴するものの務めでもある。商人である維摩が出家者に一矢報いているのも、仏教内部からの批判と反省の声であることを思い知って、常に自戒と努力とを積み重ねなければならない。それにしても維摩のような大らかな心情をわたしのものしたいと心から願わずにはおられない。

維摩経十喻中に此身如夢といへる心を夢や夢うつ夢とわかぬかな

いかなる世にかさめんとすらん

（新古今集）

宗康 衛門

夢なのか現実も夢なのか、そんな人間のおろかな分別は、み仏の大らかな世界に任せる以外、抜け出す必要とてないが、古えの歌人は、このような歎きを多く歌っている。それだけでよいものだろうか。

新規会員

◇滋賀・山陽秀侯◇鳥根・中島龜二郎◇岡山
極楽寺◇北海道・山田三夫◇福岡・吉田光雄

会費御礼

◇熊本・渡辺善広◇北海道・瑞龍寺◇神奈川
・田辺直太郎◇神奈川・大長寺◇神奈川・貞
宗寺◇福岡・本覚寺◇香川・上野忠紀◇山口
・受光庵◇神奈川・吉山信子◇大分・信行寺
◇秋田・小熊良登◇山形・佐藤行宥◇神奈川
・山本徳英◇北海道・山本龍海◇東京・岩沢
清次郎◇京都・法鷲寺◇大阪・安養寺◇京都
・真栄旭朗◇北海道・畑守義山◇群馬・本光
寺◇和歌山・広原寺◇山口・淨泉寺（改称略）

◇正しい信仰は家庭から◇

新版ひめくり

心のあゆみ

A判

価格 七〇円 二〇円

体裁 ダテ 30CM ヨコ 10CM

割引 一〇部以上 一割 引

五〇部以上 一・五割 引

百部以上 二割 引

送料 実費

(百部以上より無し)

修養ひめくり

B判

価格 一〇〇円 四〇円

(一〇部以上より割引あり)

法然上人鑽仰会

東京都千代田区
飯田町1の21

振替 東京 82187 電話 (332) 5944

編集後記

▽昨年三月に佐藤賢順先生十二月に真野正順先生と法然上人鑽仰会のみならず、浄土宗並びに仏教界にとつても貴重な人達を失った。

▽しかし、故人の意志は餘餘にこの社会に実現されつつある。法然上人鑽仰会の再結成運動もその一つであり、新規会員が次第に多くなってきた。より以上の御勸誘を乞う。

▽「浄土」で生きる今日と明日のキヤッチ・フレーズの如く、正しい信仰運動を展開しなければならぬ。左右両思想に盲従することなく、仏教特有の運動を現実化しなくてはならない。この意味で、所謂「第三文明」という語は面白い(博)

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 五月号

昭和十年五月廿日

第三郵便物認可

昭和三十八年四月廿五日 印刷

昭和三十八年五月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都千代田区飯田町一ノ廿一

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京三三二二局五九四四番

振替東京八二一八七番

浄土トラクト

大正大学教授・文博 佐藤賢順 著

再版

信仰へのみちびき

B 六版・十六頁
定価十五円 二十円

目次

- 1、大慈悲の仏教
- 2、知性を超えて
- 3、美的情感を超えて
- 4、本願の不思議にて
- 5、すべてを包む愛
- 6、人生は信ずる心から
- 7、お導びきのまに

村瀬 秀雄 著

月影抄

御法語の栞

目次

- 1、上人の日常（われ聖教を見ざる日なし）
- 2、浄土宗の意義（われ浄土宗をたつる心は）
- 3、道の求む（かくの如くして昨日もいたうらに暮れぬ）
- 4、決定の信（我は烏帽子もきぬ法然房也）
- 5、弥陀名号の功德（無礙光とは）
- 6、念佛のすがた（つみは十惡五逆のものも）
- 7、念仏を勧める（不軽大士の杖木瓦石を）
- 8、あとがき

東京都千代田区飯田町一ノ二一

申込先 法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

B 六版・十六頁
定価十五円 二十円

日本一の生産・設備

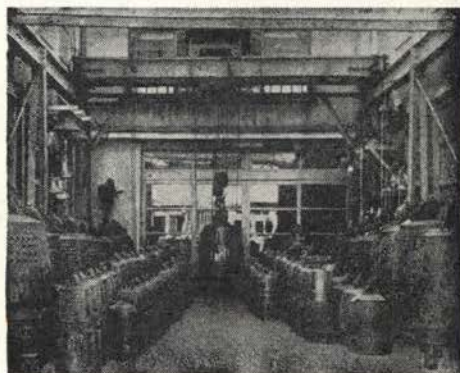
梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響理學博士青木一郎先生

梵鐘界の權威 日展参事香取正彦先生
芸術院賞受賞



鋳師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分（梅田新道大映横東へ一丁右側）

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 040 8847番 本社工場 高岡市横田